



## 病院経営とパリアン5

医療法人パリアン理事長  
川越 厚

### 3. 賛育会病院長に就任するまで(その3)



#### ライフケアシステムへの就職

私は42歳の時(平成元年10月)東大医学部講師(東大分院産婦人科)を辞し、ライフケアシステム(以下、LCS)のメディカルディレクターに就任した。LCSを選択したのは佐藤先生の引力が強かったこともあるが、体力的に石原先生の要求に応えるだけの自信が私にはなく、社会人としての経験があまりにも乏しかったことが主な理由だった。

それに加えて、病院で行われる医療しか知らなかった私の目には、在宅医療という世界が大変刺激的かつ魅力的に映った。

LCSは1981年(昭和56年)に創設された、医療の場における会員制のユニークな互助組織である。創始者は、我が国の在宅医療のパイオニア中のパイオニアである佐藤智先生。

先生はLCSのモットーとして、「病気は家庭でなおすものである」ということと、「自分たちの健康は自分たちで守る」の二つを掲げ、LCSの中でそれを実践していらした。

#### LCSで佐藤先生から学んだこと

LCSがその後の日本の医療に与えた影響は、きわめて大きい。

私自身は直接LCS指導者の佐藤先生から、在宅ケアのいろはを教えていただいた。これは願ってもない幸運だった。

それと共に、先生から学んだもう一つ重要なことがある。

それは、組織の長として組織をリーダーする場合、その組織の「理念を掲げること」がきわめて重要だということだった。

その学びは賛育会病院の病院長になったとき、そしてその後パリアンを立ち上げたときに大変役立った。

先生は、インドの伝統的医学のアーユルヴェーダの影響を受けた独特の医療哲学をお持ちだっ

た。すべてのことに夢を抱き、その夢を実現するために情熱を傾け、いつも前向きに新しいことに取り組む人だった。

先生が東大の医局の仲間からつけられたあだ名がバク。ひとの悪夢を食うという、中国の想像上の動物であるが、先生はそのあだ名をまんざらでもない、とっていていらしたような節があった。

私も新しいことにチャレンジすることが大好き人間で、LCSでも好き勝手にしたのだが、先生はそれを暖かく受け入れてくださった。ただし先生は非常に几帳面な方だったので、Schizophrenic(統合失調症)なタイプの私の行動には、ずいぶん忍耐されたのではないかと思う。

私の性格は変えられないので仕方がないが、いろいろな面で便宜を図ってくださった先生には今も深く感謝している。また、先生が私に期待したことに対して十分応えられなかったことは、今でも申し訳なく思っている。



#### 病院経営に関して佐藤先生から学んだこと

佐藤先生はLCSを始める前に、東村山にある白十字病院の病院長を経験しており、折に触れてその時のことを話してくださった。

「川越君、病院長なんて長くやるものではない。恨まれることはあっても、感謝されることは決してないからね。」

倒産寸前だった赤字病院を苦勞して立て直した実績があるにもかかわらず、先生のことを理解してくれる職員は少なく、<2ページに続く>

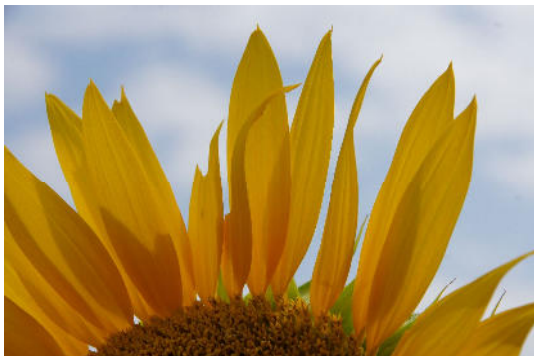
< 1ページから >

それどころか在任中はいろいろなところで摩擦が生じたようだった。

「長くやるものではない」という先生のこの言葉は、自分自身が病院長を拝命したときの、私の基本的な姿勢に大きな影響を与えた。

しかし、パリアンの立ち上げに際しては、自分の理想を医師として働ける限り続けたいと考えていたので、このような基本姿勢はまるで持たなかった。

「組織は、自分の目が届く範囲にすること。適切な規模を保つことが重要だ。」



これも佐藤先生の教えだった。賛育会病院というよりも、社会福祉法人賛育会のあり方を考えたとき、非常に示唆に富む言葉だとあらためて思い起こしている。

賛育会の歴史を紐解けば明らかだが、社会福祉法人賛育会は、終始、非常に良心的な運営をしてきた。その分行政からの信頼は厚く、特に箱物の管理運営依頼が多かった。

私が病院長を務めていた時期は、法人が“Scale merit (規模の利益)”を錦の御旗に掲げ、どんどん事業拡大していった時期である。しかし Merit よりも Demeritの方がしばしば問題となっており、実際問題、会議などで時間を取られるし会議のために遠方まで赴かなければならなかった。

賛育会の諸施設を地域の事業所単位で独立させるべきだと基本的に考えていた私は、会議でいつもこの Scale merit の言葉を冷やかに聞いていた。

## 第2回ボランティアの集い、開催

### 活動の幅を広げていくことや垣根を超えた活動応援などを検討

第2回ボランティアの集いが平成27年7月18日(土)10時30分～12時、パリアン研修室で14人が参加して開催された。

第1四半期の活動報告と今後の活動予定に引き続き、ボランティア活動を活発するための検討を行った。

仕事を持っているボランティアや新人ボランティアが活動できるようなシステムを作ること及び土曜日にできる活動を検討したらどうかという意見がでた。これに関連して、講演会の開催など地域への啓発活動をするなど、外に向けての活動の幅を広げることについても検討した。

また、各ボランティアは希望するボランティアに活動登録しているが、その垣根を超えて、登録していないグループの活動でも応援できるようにすることや活動が毎週充実しているサロン・ド・パリアンに新人ボランティアの参加を促すなどの案もでて、垣根を超えた活動応援は実践し始めている。

他には、最近看護師さんとのコミュニケーションが不足しているとの指摘があった。パリアンボランティアは、パリアンのチームの一員として組織されており、スタッフとの協力は欠かせないが、特に看護師さんとの信頼関係が大事である。パリアンとしてもボランティアとスタッフの交流会などのコミュニケーションの場を設けているが、信頼関係をより深めるためにボランティア側から働きかけをしたらどうかという意見が出て、パリアンが計画する“勉強会”“デスクンファレンス”に、積極的にボランティアが参加して、ボランティアとしての意見があれば発言するなどして、看護師さんとのコミュニケーションの向上を図っていくことになった。

続いて、7月25日に行われた公開講演会の司会・進行、会場案内、受付、会場整理、音響設備などの各作業の任務分担を決めた。





## プロフィール 「医は仁術」水田哲明先生の巻



水田先生は、平成27年4月からクリニック川越の訪問診療医として勤務している。

出身は長崎県南島原市で、雲仙普賢岳の大火砕流で大惨事となったところである。高校まで島原にいて、島原

高校から東大医学部に進学した。

水田家は1700年代後半からの代々続いた医者の家系で、実家は「事仁亭博愛堂」と号し、看板には「医は仁術」と記されていたという。父親は十代目、お兄さんは十一代目を名乗っていて、島原地方の医者の名家である。お兄さんは去年、日本医師会の番組「赤ひげのいるまち」(BS・TBS)で紹介された小児科医である。第42回医療功労賞を受賞した。

そういう状況の中で育った先生は、小さい頃からなんとなく医者になろうと思っていたところ、強いインパクトを与えた事件が起こった。それは、中学の頃に父親が事故で三日ぐらい意識がなかった時のことで、長崎大学から往診に来てもらって、すごく励まされ、有難さを感じたことから、医者になろうと強く思ったそうだ。

医者になってしたいことがあった。「人が死ぬことに非常に興味と恐怖感とを持って、医者になると人が死ぬところが見られ、見ることで死ぬということがどういうことか見極めたいという気持ちはありましたね。」

先生は、川越厚先生と卒業が同じ年度。その理由は、あの時代は学園紛争が激しくなり、授業が出来なくて進級できない年があった。だから、厚先生は1年間卒業が伸び、先生は半年伸びて、厚先生は4月卒業、先生は9月卒業となったわけで、昭和48年の卒業は二期あって、厚先生は前期、先生は後期の卒業。だから厚先生は一年先輩だ。

NTT関東病院に9年間、吉川中央総合病院院長を14年間歴任され、現在名誉病院長だが、吉川病院

には今も週4日外来、訪問診療などを行い、非常に多忙な毎日を送っている。そんな中、毎週火曜日はクリニック川越で訪問診療をしている。

厚先生を、学生の頃は全然知らなかったという。NTT関東病院在籍中に、軽井沢での厚先生の講演で、がんの告知や緩和ケアの話聞いて、非常に感銘を受けたことが、厚先生とのつながりのキッカケである。

その頃に在宅ホスピス協会を厚先生が立ち上げて、水田先生がその世話人になってから、ホスピス協会の集まりに出るようになり、それからは、頻繁に会うようになった。厚先生は賛育会を改革しようと思い、先生を賛育会病院に来るように誘い、引き受けた。賛育会には一年ぐらいいたが、その後吉川中央総合病院で院長に就任した。

院長を辞してから、パリアン通信で厚先生の頑張りを知り、厚先生を少し休ませてあげたいという気持ちになって、パリアンから声がかかるのを待った。そこに空けておいた火曜日にパリアンから訪問診療の仕事がきたので、二つ返事で引き受けた。先生も吉川病院やクリニック川越の仕事で、1週間休みなしなのに、厚先生の健康を心配してくださり、頭が下がります。

「趣味は？」と聞いたら、「今、家庭菜園をやっています。家内がやってるんじゃなくて、僕がやってるんですよ」といって、トマトやトウモロコシなど水田農園の野菜類を持ってきてくれた。奥さんがやるはずだったが、うまくすり替わられて、先生がやるハメになったとか。でも、結構楽しんでやってるみたい。



「医者になって良かったとか、あんまりそういうことは考えたことはないんですが、人並みの生活ができるようになった、人並みの人間になれたかもしれないというぐらいの感じですかね。いろんなことがあって、ちょっとあんまり考えたことがないですね」

健康に留意されて、一日も長くパリアンにいて下さい。

### 東京大学医学部学生がパリアンで実習

### 24日、実習まとめ発表

7月21日から24日まで、東京大学医学部5年生の公衆衛生学の実習先の一つとして、パリアンで学生5名の実習を受け入れました。実習中は、医師や看護師に同行して患者さんのご自宅に訪問させていただきました。家で過ごす患者さんやご家族のお話は、医学生にとって本当によい学びになったようです。ご協力ありがとうございました。

今後は8月17日～21日に帝京大学医学部、8月19、21日に帝京大学大学院公衆衛生学研究科からの学生実習を予定しています。



最終日に実習のまとめを発表する学生

## パリアン第3回公開講演会を開催、盛会のうちに終わる



ボランティアグループ・パリアンが初めて主催した第3回パリアン公開講演会は、平成27年7月25日午後2時から江東区亀戸の亀戸教会で開催した。講演会は、一般来場者108名、ボランティア・スタッフ22名の130名の参加という大盛会であった。そんな中、ボランティアは、1週間前に打ち合わせたとおりに各役割を積極的にこなし、講演会の運営は滞りなく終わった。

まず、ボランティアの野本ちさとさんの「在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動」の講演があった。がん末期患者をケアするパリアンのボランティアの活動を、野本さん自身の活動をとおして紹介した（講演内容(抜粋)は5ページに掲載）。

続いて、川越厚パリアン理事長の「在宅ホスピス医25年の経験～死の直前に起きる不思議なできごと～」の講演が行われた。ホスピス医の経験を生かして、盛り沢山の不思議な事例に観衆は呑み込まれたようだった。

死ということは、生きていることの裏返しで、生きることが出来ないこと、いわゆる不可逆の状態が死だと教わって来たという。医者が死と診断したら死体となり、物になる。これに対してホスピスケアの医者になった厚先生は、死の前後に不思議な現象が起きることがあるということに気づき、人の死は、人が生まれる時と同じように一連のプロセスであると考えようになった。



今までに見聞きした看取りの前の仲良し体験、お迎え体験等の事例を数例紹介しながら、不思議なできごとを説明した。患者は自分が死ぬ時を予測できるのだろうか、死に逝く人はどのくらい意識があるのだろうか、という興味深い話もあった。患者は昏睡状態になっても周囲のことがわかり、耳は聞こえていることはよく言われるが、涙を流すということもよくあり、また、亡くなったあとに表情が変化して、いい顔になるというのもよくあるという。

お迎え体験は、在宅ホスピスケアである調査によれば4～5割の方が経験し、死の入り口に亡くなった親や親しい方が迎えにきており、死の周辺の中で起きる不思議な現象は、我々が持つ“死への恐怖”を和らげているという考えもあるようだ。

## 「在宅緩和ケアを経験して」 帝京大学医学部附属病院研修医・傍島千尋



7月1日から1か月間、帝京大学医学部附属病院研修医である傍島千尋先生が、クリニック川越で研修を受けた。

傍島先生のごことは「在宅ホスピスは経過が短いので、介入の仕方が病院と全然違うと感じました。パリアンに来て衝撃を受けたのは、看取られた患者さんの顔がかなり穏やかであること、姿がきれいな状態だったことでした。ご家族の心も穏やかであって、何人もの人に支えられているので、非常に温かみがある医療だと感じ、人間味のある医療が在宅だと感じました。在宅での痛みのコントロールをみせてもらったので、この経験を生かして、病院でできることをやっていけるのではないかと考えています。

パリアンはチームケアができています。自分達の役割りと出来ることを理解して、きめの細かいケアをしているという印象でした。それぞれの立場から意見が言いやすく、情報共有がうまくいっていると思いました。

スケジュールを調整してもらって、いろいろな患者さんのところに行かせてもらい、貴重な経験ができて、1か月間濃密な実習ができました。ありがとうございました。」



**「在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動」(抜粋) 講演 野本ちさと**

ボランティアの野本ちさとさん

パリアンは病、特にがんなどによって近い将来死を迎える患者さんとその家族に対して、主に患者さんの居宅で医療、看護、その他の全人的なケアを提供しています。「家で過ごしたい」という希望を持つ患者さんとその家族を丸ごと支える訳です。ボランティアの役割は、患者さんやご家族と人間としての関わりを持つ事です。医療などの専門知識は持っていませんが、一緒に泣いたり笑ったり傍によりそうことは出来ます。

ボランティアをはじめのきっかけはそれぞれだとは思いますが、私の場合は50歳を目前にし、これから何をしようかと考えた時に、何か社会に還元出来る事がしたいという思いでした。以前から興味があったホスピスとボランティアの2つの言葉でパソコンを検索したところ、クリニック川越がヒットした訳です。さいたま市に住んでいますので川越市ならお隣だし、と思ったのですがよく見ると墨田区・・・、まあ研修があるからとにかく受けてみよう。というような訳でパリアンと出会うことが出来ました。

私が活動しているサロン・ド・パリアン(がんサロン)のことを少しお話させて頂こうと思います。

ボランティアがお昼ご飯を作り、患者さんやご家族と、川越先生やスタッフの方々や私たちも一緒に、お話をしながらお食事をいただいています。お家では全く食欲を感じなかったという方が、美味しいとおっしゃって食べて下さったり、お一人暮らしでこういう家庭的なご飯が嬉しい、大勢で食べると美味しいとってくださったり。ボランティアをやっていて良かったと思う瞬間です。

話題はご病状や患者さんの現在のお気持ちや昔の思い出話、趣味のお話など様々です。最初は驚いたのですが、お葬式やお墓についてのお話になった事もあります。

サロン・ド・パリアン(がんサロン)は、患者さんの怒りや悲しみ、どうして自分ががんなどになっ

たのかというやり場の無い思いや、こらえてもこらえても溢れ出て来る涙も受け止められる場でありたいと、私は思っています。

最後に、私がボランティアをさせて頂くことで自分にどういふ変化があったかについてお話しさせて頂きます。

まず、「死」についてよく考える様になり、家族ともよく話題にするようになりました。敢えてわざわざ話題にはしないというのが一般的なのですが、パリアンチームにいる限り、死は常に傍にある出来事です。

次に、がんになって、残された時間をどう生きるかというのは選択可能だという事を知りました。二人に一人はがんになる時代にはなっても、がんを宣告されると狼狽え取り乱し、医者のお勧めのままに、あるいは万に一つの可能性にかけ抗がん剤治療や放射線治療をうけ、どんどん弱って死に至るといふ事例が周りにたくさんあります。でも、選択肢は他にもあるのです。末期の宣告を受けてからは治療するのではなく、痛みを取ってもらふ事により、体力と相談しながらしたい事をして、お迎えが来る時迄、穏やかにその方らしい時間を過ごしていらっしゃる患者さんをたくさん見してきました。

実は、ボランティアを始めて間もない頃、友人に「末期がんに患者さんに接するボランティアをするなんて、あなた自身が辛くならないのか」と言われました。私を気遣ってくれての発言でした。不思議な事に辛くはないのです。折角知り合えた患者さんとお別れは寂しいけれど、辛いというのではないようです。素晴らしい生き様を見せて下さって、ありがとうと感謝したいし、僅かな時間であっても最期のひとときを共に共有出来た事を嬉しく思っています。

患者さんたちが残してくれた言葉が心の中でキラキラ輝いています。私の大事な宝物です。患者さんやご家族の気持ちに本当に寄り添うこと、深い共感を持って接することは難しいけれど、活動しつつ学び続けていけたらと思っています。

川越先生とパリアン、そして同じ思いの仲間に出会えた事に感謝したいと思います。

## 勉強会とデスカンファレンスの今年度の予定

パリアンでは、勉強会は毎月原則第1金曜日、デスカンファレンスは原則第4金曜日に開催しています。どちらも開催時間は午後5時~6時で、一般公開していますので、誰でも参加できます。参加ご希望の方は、下記へご連絡ください。

ボランティアの方はボランティアコーディネーターに参加する旨、連絡してください。

### 【勉強会、デスカンファレンスの日程】

活動名	開催日程
勉強会	8/7・9/11・10/2・11/6・12/4・1/8(予備)・2/5・3/4(予備)
デスカンファレンス	9/25・10/23・11/27・1/22・2/26

(注) 日程が変更になる場合があるので、事前に要確認。 連絡先：03-5669-8302

## ボランティア養成講座9月5日、メモルの集い9月12日

平成27年度第1回ボランティア養成講座(第23期生)が、9月5日(土)午前10時からパリアン研修室で行われる。募集人員は10名で応募締切は8月22日(土)。講座は、ボランティアが運営し、活動状況を各ボランティアリーダーが受講生に直接語りかける。毎回どのようなボランティアが誕生するか楽しみである。

9月12日(土)午後1時~3時には、最愛の人を亡くされて1年目のご遺族をお招きして、当時や今の心境を語り合うという「メモルの集い」がパリアン研修室で開催される。

まだ心の痛みが癒えないが思い切って来てくださる方、故人を忘れないでくれたことを喜んでくださる方、今の心の内をお話して下さる方々が、それぞれお互いに自分のことを話し、聞き、少しでも気持ちが癒されてお帰りなってもらいたいと願っている、こんな集いである。

お茶の時間には、ボランティアが作る特製のケーキがあり、帰りにはやはりボランティア手作りのグッズと手書きのお手紙をお渡ししている。

## 8月のボランティア活動予定

- ・訪問ボランティア：8月3日午前10時30分~
- ・サロン・ド・パリアン：8月7日、21日、28日、(14日は休み)
- ・命日カードボランティア：今月は活動休止
- ・手作りボランティア：8月25日(火)午後1時~
- ・事務&聞き書きボランティア：休み

8月の花(芝田さん提供)



## 編集後記

ボランティアグループ・パリアン主催の公開講演会が7月25日、江東区の亀戸教会で行われた。一般来場者は108人を数え、講演会は大成功のうちに終わることができた◆これは、厚先生の知名度と講演内容の話題性が大いに影響していると思われ、講演後の感想を来場者の半数にあたる53人の方々が寄せて下さったことからわかる。会場を提供して下さい亀戸教会の関係者にもお礼申し上げたい◆しかし、忘れてはならないのが、会の企画・運営に携わったボランティアの積極的な働きであると思う。講演会の1週間前のボランティアの集いの時に、講演の進行、場外案内、受付、会場整理、図書販売、講演スライドと細かく役割分担を決めた。講演スライド班は、スライド操作などの確認のため、開催前日にリハーサルをする熱の入れよう、当日に備えた◆当日は、開場1時間前に全員集合し、猛暑日に近い暑さの中、場外案内係の4人は、熱中症の心配をよそに各配置場所に散っていった。受付係は、来場者が集中し混雑することを想定し、臨機応変に受付場所を変更した。会場係は、満席に近い座席に空席が出来ないように誘導するとともに、お立ちの来場者には折り畳み椅子を提供したり、講演中の照明やエアコンに気を配っていた。図書販売係は、講演後、厚先生のサイン会を急遽企画し、売上に貢献した。講演スライド班は、前日のリハーサルの成果により、スライドのスムーズな操作ができたし、記録写真の撮影も行った。司会は、質疑応答時間の変更、お客様の退場案内、サイン会の実施など状況変化に対応できた。手作り班は、急遽作品展示コーナーを作り、来場者の目を止めていた◆このようなイベントの時に、結束できる仲間のつながりに感嘆し、そんな仲間の皆さんに、イベント以外の時にも、もっともっと活動の場を提供できるようになりたいと思っている。今回の講演会では、自主的、積極的に行動されたボランティアの皆さんにお礼申し上げたい。(I. E)